

解答・解説

1. 現代語訳

1. 得意になって思い上がっている人も、長くは続かない。「おごる」は「思い上がる・得意になる」、「久しからず」は形容詞「久し」（長く続く）の未然形＋打消「ず」で「長くは続かない」。栄華は永遠ではないという無常観を述べた一文。
2. ただ（短くはかない）春の夜の夢のようだ。「ごとし」は比況の助動詞「～のようだ」。春の夜の夢のように、栄華がはかなく短いものであることをたとえている。
3. （清盛公のありさまは）伝え聞くにつけても、心にも思い浮かべることができず、言葉でも言い表すことができない（ほどだ）。「承る」は「聞く」の謙譲語。「心もことばも及ばれね」は「心（で思うこと）も言葉（で言うこと）も及ぶことができない」の意で、清盛の権勢のすさまじさを強調している。

2. 文法・敬語

4. 完了の助動詞「ぬ」の終止形。「ほろび（ナ行上二段・連用形）＋ぬ」で「滅んでしまった／滅んだ」。打消の「ず」（連体形「ぬ」）と混同しないよう注意。ここは連用形に接続しているので完了。
5. 「れ」＝可能の助動詞「る」の未然形。「ね」＝打消の助動詞「ず」の已然形。「及ば（未然形）＋れ（可能）＋ね（打消・已然形）」で「及ぶことができない」。下に打消があるため、「れ」は可能の意味になる。
6. 係助詞「こそ」があるため、係り結びの法則により文末が已然形になっているから。「こそ」は已然形で結ぶ。打消「ず」の已然形「ね」で結ばれている。

3. 語句

7. 訪ねる・調べ求める（過去をたずね探る）。「とぶらふ」には「訪問する」「弔う」などの意味もあるが、ここは「遠く異朝（昔の中国）の歴史をたずね探してみると」の意。次の「うかがふ（＝さぐり見る）」と対になっている。
8. 諸行無常＝しよぎょうむじょう／盛者必衰＝じょうしゃひつすい（「しょうじゃひつすい」とも）。「諸行無常」はこの世のすべては移り変わり一定でないこと、「盛者必衰」は勢いの盛んな者も必ず衰えることをいう仏教語。
9. 嘆く・悲しむ。「愁ふ」は「嘆き悲しむ」の意。「民間の愁ふところ」で「民衆が嘆き悲しんでいること」。

4. 内容理解

10. 勢いの盛んな（たけき）者も、結局は滅びてしまうこと（人の栄華のはかなさ）を、風の前に吹き散らされる塵にたとえている。権勢を誇る者も、風に飛ばされる塵のようにあっけなく滅びるという、盛者必衰・無常をたどった表現。

11. 「異朝」＝中国（外国）。「本朝」＝日本（わが国）。中国の例（趙高ら）を「遠く異朝」、日本の例（将門ら）を「近く本朝」として対比的に並べている。

12. いずれも権勢を誇りながら、主君に従わず楽しみをきわめて、長く続かず滅びてしまった人物である。これらの例を挙げることで、「盛者必衰・諸行無常」というこの作品全体の主題を示し、最後に平清盛もまた同じ運命をたどることを暗示するため。中国・日本の悪例を列挙して一般論（栄える者は必ず滅びる）を示し、その締めくくりとして清盛を置く構成になっている。

5. 文学史

13. ジャンル＝軍記物語。語り広めた芸能者＝琵琶法師。『平家物語』は鎌倉時代に成立した軍記物語で、琵琶法師によって琵琶の伴奏で語られ広まった（その語りを平曲という）。

14. 作者＝信濃前司行長（しなののぜんじゆきなが）。思想＝諸行無常。『徒然草』第二二六段に、信濃前司行長が著し、盲目の僧生仏（しょうぶつ）に語らせたという説が伝わる。ただし作者は未詳とするのが一般的。冒頭に示される「諸行無常」が作品全体を貫く思想である。

暗記（空所補充）

15. ア＝諸行無常／イ＝盛者必衰／ウ＝春の夜の夢／エ＝風の前塵 冒頭の名文は暗唱できるようにしておくこと。対句（「祇園精舎の鐘の声」対「沙羅双樹の花の色」、「春の夜の夢」対「風の前塵」）にも注目。